



## 「帝国日本の気象観測ネットワークⅢ—水路部・海軍気象部—」

山本晴彦 著

農林統計出版, 2017年1月  
598頁, 5,800円 (本体価格)  
ISBN 978-4-89732-360-2

本書は、著者の山本晴彦氏の「帝国日本の気象観測ネットワーク—満洲・関東州—」(「天気」61巻4号に書評)、「帝国日本の気象観測ネットワーク—陸軍気象部」(「天気」63巻2号に書評)に続く、戦前・戦中期における気象観測を記した著書の3冊目である。陸軍気象部に続き、本書は水路部・海軍気象部に焦点を当てて記述したものである。目次は以下のような構成である。

- 序章 課題と方法
- 第1章 水路部の創設と気象観測の実施
- 第2章 鎮守府における気象観測
- 第3章 海軍航空隊における気象業務
- 第4章 海軍における気象要員の養成
- 第5章 水路部における気象業務の拡充
- 第6章 気象観測所の開設と展開
- 第7章 海軍気象部の特設、独立と終焉
- 第8章 特設気象隊の創設と展開
- 第9章 水路部修技所と海軍気象学校の設立と展開
- 第10章 海軍の気象資料
- 第11章 終戦時の気象業務
- 終章

東京気象台(気象庁の2代前)が創設され、気象観測を開始する1875年に先立つ1873年に水路部の前身の海軍水路寮頭である柳 樽悦の提唱により、東京で気象観測が開始している(第1章)。ただ、柳 樽悦が水路部を離れた直後の1889年に気象観測は終了してしまう。その後、海軍での気象観測は、鎮守府で1893年から、海軍航空隊で1923年から実施され引き継がれるが、水路部での気象業務は1936年まで待たなければならなかった。海軍はその必要性から、樺太や千島列島の北方沿岸域、南方では南洋諸島に次々と気象観測所を開設していった。さらに、日中戦争前後から特設気象隊の設置が相次ぎ、上海本隊を置く第二気象隊、インドネシア スラバヤに本隊を置く第三気象隊、ミク

ロネシア トラックの第四気象隊、北海道厚岸の第五気象隊、パプアニューギニア ラバウルの第八気象隊と拡大していった(表8-9)。その膨大な観測所を担う観測員の養成する機関や学校に関しても記述されている。

前書の書評などにも記載されている通り、本書は気象資料のみならず、行政文書を数多く収集し掲載することで、内容が裏付けられている。整備された気象データを扱う気象学会員には確かに関心の薄い内容かもしれない。ただ、気候変動や地球温暖化の議論を行うには、戦前・戦中期は避けて通ることはできない。全球データでは隠れているが、特に戦時中の太平洋域やその周辺沿岸国での気象や海洋のデータの欠落は著しく、解析には耐えられないことはあまり知られていない。気象や海洋観測が、戦争でそれまで担っていた国から統治する国が変わり、千島や南洋諸島は、海軍の特設気象隊などが気象観測を広く展開した。残念ながらこれらの気象資料の多くが焼却されたため、気象や海洋データの空白期間となっている。本書は、この空白期間に行われた気象観測の実態が詳細に書かれており、まだ見つかっていない気象データの存在の可能性を掻き立てられる。本書ではそれだけでなく、記録文集「あおぞら」を紹介しながら、多くの若い気象技術員が育成され、観測に従事し、戦死していることも忘れていない(表9-2)。

千島では霧について、また南洋諸島では当時認識されていなかったが、熱帯モンスーンについて、現在でも実現できない密な地上・高層気象観測網が構築され、観測されていた。皮肉にも軍事目的のため、これらの地域において、現在にも通じる霧と熱帯モンスーンの研究が行われていた。研究だけでなく、天気予報も求められており、高橋浩一郎(後の気象庁長官)がまとめた内南洋(現在のパラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島)の「天気予察資料」(図10-35)が掲載されている。日変化や台風に関する興味深い考察も見られ、熱帯モンスーン地域の優れた調査のあとが伺える。前書の陸軍気象部や台北帝国大学での熱帯気候学研究との関連は不明だが、本書は特に霧や熱帯モンスーン気象の研究に携わっている方の一読を勧めたい。

台風に関して1935年9月26日に遭遇した「第四艦隊事件」を取り上げている(第2章)。関東の東海上にて海軍の大規模演習中に台風が襲い、駆逐艦2隻の艦橋前方が切断し、他の艦船にも大きな被害を出した。

当時報道されなかったが、台風研究の発展に大きく貢献したことが饒村 曜氏の「台風物語」に記されている。また、表10-16の飯田久世氏が残した資料の中に、「既往における南洋群島の暴風被害（自明治二十四年至昭和十一年）」（1941年）という資料に目が留まり、著者の山本氏から資料を入手すると、「本資料ハ南洋気象台ニ於テ暴風被害調査記録及土人（南洋諸島住民）ノ口伝ニ依リ収集整理セルモノナリ」とはじまり、住民に聞き取り調査を行い、台風被害を記録して

いることがわかる。この当時の南洋諸島はドイツ統治時代が含まれ、評者の現地調査やドイツ気象局などとの協力でも知らない台風被害が記載されており、過去の気候を復元する貴重な情報が本書に多数収録されていることを物語っている。著者は樺太などの北方地域や南洋諸島の南方地域の続編の執筆を進めており、さらなる出版に期待したい。

（北海道大学大学院理学研究院 久保田尚之）